

保育者の成長過程：高瀬慶子の ライフヒストリー研究(2)

伊東 久実

1. はじめに

本稿は、身延山大学仏教学部紀要第10号に続くものであり、高瀬慶子のライフヒストリーの第5期から第7期に当たる部分である〔第5期 保育所作り運動（1946年～1947年） 第6期 労働者クラブ保育園（1948年～1953年） 第7期 豊川保育園（1955年～1985年）〕。

前稿では若き保育者高瀬が、取り囲まれる保育者集団や社会状況によって職業観を形成し、職業に対する責任感を高めていく成長過程を示した。本稿では、戦後新しい日本にふさわしい新たな保育理論と、それに基づく保育方法を仲間とともに懸命に模索し、同僚性によって専門性を高めていく高瀬の姿を描く。

2. 年譜

本稿で扱う第5期から第7期までの年譜とする。

西暦	歴史体験	ライフヒストリー
1947	日本国憲法施行、児童福祉法制定	民主保育連盟書記として保育所作り運動に参加
1948	児童福祉施設最低基準公布、文部省「保育要領」	北区労働者クラブ保育園勤務
1952		民主保育連盟除名
1953		北区労働者クラブ保育園解雇、井の頭保育園勤務、幼児教育研究会参加 保育問題研究会参加、「おはなしづくり」の実践
1955		豊川保育園（東京都北区）勤務、「新しい保育園の運営」、「はなしあい保育」の実践
1959	国連「児童権利宣言」採択、伊勢湾台風禍	保育学会にて「はなしあい保育」の研究発表、「幼児と保育」
1961	60年安保闘争高まる	「伝え合い保育」の実践を継続
1970		ソビエト保育事情視察
1973	オイルショック	【子どもの発達と集団】

1974	戦後初のマイナス成長	『保育の探求』、『3歳児保育』
1983		豊川保育園園長として就任
1986	チェルノブイリ原発事故	園長退職

3. 保育者としての成長過程

(1) 保育所作り運動（1946年から1947年）

① 保育者の社会的使命を自覚する

本所柳島地区の愛育隣保館跡地の常設保育所作りは愛育会の反対に会い難航した。当時、愛育会も戦後の混乱した経済状況において、母親や子どもたちの要望に応えることは困難であった。

野外保育所での保育を行いつつ高瀬は、母親たちと建物のある保育所をつくるための努力を重ねた。高瀬は参加していた民主保育連盟において、塩谷アイ、浦辺史らに相談する中で対応策を練った。その策とは、愛育隣保館跡地近くの都電東交柳島車庫の労働組合と日教組墨田支部労働組合の2つの会合に高瀬が出掛け、地域の子どもの文化活動発展のために、愛育隣保館跡地の保育所づくりへの協力を訴えるというものであった。20歳の高瀬は恐る恐るこの会合へ出掛けたという。「モゴモゴ言うと、塩谷さんに怒られるのよね。」と、未経験の大仕事に直面し、困惑しつつも挑戦し続けた当時を思い返して高瀬は語った。

これまで愛育会との直接交渉において断りの言葉ばかり聞き慣れてきた高瀬にとって、双方の労働組合の人々の「よし、わかった。」という頼もしい快諾の返答は心揺すぶられる体験であった。

やっぱり働く人たちの力って強いんだなあ。こういう人たちと仕事をすすめていくにはどうやったらいいのだろうって真剣に考えたわ。

そして労働組合、地域住民（すみだ母の会の参加者）らと話し合いを重ね、共に愛育会との交渉に臨むことになった。「あなた、そりゃあおもしろかったわよ。」当時を振り返る高瀬はそう言って続けた。

この交渉のために用意された一台の都電は労組の人々、父母、子どもたち、そして保母を乗せて愛育会研究所へと勢いよく走ったの。研究所の前に来た時、「あんたは隣の公園で子どもたちの面倒をみていなさい。我々が交渉するから。」と言われたのよ。

労働組合の人々にこう言われ、高瀬は初めて保母の仕事の社会的責任を自覚した。そこには

これまで抱えてきた保母の仕事に対するむなしさはなかった。「地域の生活文化を高める、こういう闘いの中で、私には保育という任務があるんだ。」¹⁾と。つまり、人は協力することで世の中を変えることができ、自分も連帯してその一役を担うことでしあわせな社会作りに貢献できるという自覚である。あの悲惨な戦争は、一人のボスを皆が認めた結果であるとする高瀬にとって、保育所作りの活動は人と人の連帯によるしあわせな社会づくりを意識する直接的な契機となったのである。さらに母親や労組の人たちのように自分たちの生活改善のために自主的に要求する力が強まれば、人間を無視した戦争に巻き込まれる危険性は減るだろう、新しい社会はみんなの利益を考えそのために協力できる人間、どんな時でも自分の要求をはっきり言える人間の集まりにしていきたい、と考えるようになった。

高瀬は民主保育連盟において、民主主義についての講話を興味深く学び続けていた。終戦後、「何かを求めたい」気持ちからその末席に参加した研究会で学んだ話が、実体験として理解されようとしていた。それが波多野完治による以下の言葉である。

民主主義とは自分たちで考え、自分たちで行動することだ。一部の人の利益のための考えに強いられた結果がこの敗戦という憂き目である。これからは一人一人が自分の考えを持ち、皆の利益のために協力していかなければならない。²⁾

愛育会との保育所作りの話し合いは平行線のまま、決着しなかった。交渉先を区に変更し、親たちと共に区役所の担当者との交渉を何度も重ねた。保育所を建てるための運動は熱心に続けられ、並々ならぬ努力の結果、ついに区から昭和23年度の予算に保育所建設費20万円の計上を得た。しかし一番適切な場所として希望した愛育隣保館の跡地への建設について、やはり愛育会の承諾は得ることができなかった。そして愛育隣保館跡地ではなく、その地域から離れた場所での設置に譲歩してようやく公立の保育園（区立横川橋保育園）が設置される運びとなった。

まだ21歳の高瀬ではあったが、保母資格があり、さらに母親たちとの良好な関係を築いていたため、横川橋保育園の開園と同時に採用となった。この時高瀬は、保育所に働く保母と子どもを預ける母親が、働く者同士として協力し合って子どもを育てる民主的かつ主体的な運営形態を志していた。しかし、現実とは異なった。区が登用した園長の管理主義的な考え方は、地域や母親との連携を重要視しなかった。高瀬がやっと到達した「自分たちの生活改善のために連帯して、自主的に考え行動する」理念を实践することは許されなかったのである。さらに、保育園がこれまで保育所作り運動のために一緒に行動してきた親や子どもたちの居住地から離れた場所に建設されたために、親の協力を得ることが物理的に困難になった。このような状況に

おいては、おぼろげながらイメージし始めた「民主的な子どもたちを民主的に育てる」という目標は達成が不可能と考えざるを得なくなり、辞職することを決意した。生活の保障という点から考えれば、公立である横川橋保育園に留まる選択肢もあったが、これまで多くの先輩保母たちと学びあいを重ね、保母の社会的責任を自覚してきた高瀬は、すでに自分の信念を曲げてまで公立保育園で安定した日々を望むより、「同じ考えを伸ばしてくれる先輩や仲間の方へ魅力を感じるようになっていた」と言う。³⁾

② 保育所に対する母親の意識の掘り起こし

高瀬は民主保育連盟の書記として保育所作り運動を邁進することになった。書記の仕事について振り返る高瀬は微笑みながらこう語った。「あの時初めて原稿を書かされたの。ぎゅーぎゅー書かされたのよ。」そう言いながら『生活共同組合便覧』（1949）を書棚から引き出した。「保育所をつくる活動についての原稿なんだけど、22歳の私が毎日書いていくと、毎回書き直されるのよ。この時はじめて原稿料をもらって。民保（民主保育連盟）の会の帰りに皆に中華料理をご馳走したわ。はっはっ。」

民主保育連盟での高瀬は、保育についてばかりでなく婦人運動についても学んだ。そして、横川橋保育園での保育所作りの経験を生かし、塩谷アイ代表と共に様々な協同組合や婦人会の集まりに足を運び、母親たちの「保育所がほしい」という意識の掘り起こしに奔走した。

「お世話してあげるんじゃなくて、一緒に考えよう！ なのよ。単に慈善的に運動をやったんじゃあないの。どうすれば保育所がつくれるか、母親たちの要求を組織化するのよ。」高瀬は熟っぽく語った。

いつでも野外保育でね、雑巾と、バケツと、子どもたちはすごい鼻タレだから紙と、紙芝居と縄などの七つ道具をリュックに入れて、いろいろな協同組合とか婦人会とか集まりの所へ行っっては子ども会をするの。そうすると親たちは保育所をほしいと思うようになる。⁴⁾

この保育所作り運動について、保育問題研究会のメンバーである泉順は次のように分析している。

子どもの成長する姿を通して、保育所の必要性・重要性を父母たちに理解してもらう。そこを出発点にして父母と保母の協力で、さらに労組などの応援も得て、地域に保育所づくり運動を展開することがねらいたのである。託児的発想つまり、貧しい家庭の子どもを預かるという考えを乗り越えようというわけである。そればかりか、地域に保育所をつ

くる運動を通して、新しい社会をつくりあげようという目標も掲げていた。⁵⁾

保育所作り運動は、まだ保母としての経験が浅い高瀬が民主保育連盟という組織において様々な学びを深める中で行われたものである。根底には横川橋での保育所作りで得た「働く父母と共に子どもを豊かに育てていく！」という決意があった。この頃の高瀬はこの決意を具現化する手段を仲間との学び合いで獲得していたのである。

やっぱり先輩よ。先輩と一緒にたくさんのことを学びあったわ。どういう研修をするかその設定も意識して行った。ある時は保育所づくりに関する実践を叩き合ったり、いろいろな先生を呼んでお話を聞いたり、読書会もしたわ。そればかりでなく、保母の資格試験の勉強会もしたの。

当時、東京都において公立保育所は増加しつつあったが、民間の保育所はわずかという状況の中で高瀬らのこうした保育所作り運動は続けられた。

開始から1年余りでようやく労働組合の文化活動の殿堂として北区に診療所、生協、保育所が作られることになった。1948年11月労働者クラブ保育園の誕生である。

(6) 第6期 労働者クラブ保育園（1948年11月から1953年3月）

労働者クラブ保育園時代は、民主保育連盟の活動に参加し、民主主義についての学びを深めながら、保育者としての専門性を向上させていく時代である。そして、自己研鑽のために大勢の仲間たちと考えを出し合い、意見を交える研修スタイルを獲得した時期といえよう。

① 新しい保母像・子ども像を求めて

保育所作りを通して得た、「人と人との連帯は、世の中を変えることができる」という実感と、「保母として自分もその一翼を担う」という使命感に目覚めた高瀬は、いつも「何かを求めたい！」「戦争のない平和な世の中で保育を続けていくための方法を持ちたい！」「戦争は済んだ。二度とこの苦しみを受けないためには保母として何をどうしたらよいのだろうか。」という欲求と問いに突き動かされていた。

1940年代後半は、民主保育連盟をはじめ、歴史教育協議会、数学教育協議会、教育科学研究会、栄養士の協議会、民主洋服クラブ等、戦後の方向性をそれぞれが模索しあう研修の場が次々と立ち上がった。

戦後溢れるほどいっぱいあったわ。研究会の花盛りよ。この頃あんまり聞かないね。皆どうしているだろうね。

このような時代においては、高瀬の「何かを求めたい!」「保母として何をどうしたらよいのか!」という欲求と問いは周りの人々とも共有できるものであり、仲間とともに考える場が数多く作り出されていった。とりわけ高瀬がかつて幼児集団疎開保育園の同僚、畑谷光代と共に勤務することになった労働者クラブ保育園の運営内容や保育に対する考え方は、阿部和子や乾孝らを中心として民主保育連盟が相談役となって進められた。保育園での実践を元に「新たな保育」を作り上げていこうとする気運に満ちていたという。

保育園の開始年度には、労働者の子どもたちの可能性を掘り起こし、保育所の保育を豊かなものにしようという目的で美術教育の木下繁の指導を受け、職場で討議した。さらに2年目からは民主保育連盟と民主主義科学者協会の心理部会の共同研究の場として保育園を全面的に開放した。週1回の職員の研究会には実践をあずかる保育者集団に加えて、研究者や学生たちがいっしょになって具体的な問題を中心に議論を交し合った。協力者に恵まれた環境で、高瀬の「保母として何をどうしたらよいのか」という具体的な保育方法および保育観と専門性への追求がなされたのである。当時の高瀬の課題は以下のように記されている。

クラブ保育園に入ったときに、大勢の仲間と一緒にどういう子どもに育てていくのか、私たちの子ども像はどういうものか、そしてそのために今までの保育をどう捨てるのか、あるいはどうプラスしていくのか、それをもっと考えていこう、ということが大きな課題となってきたわけです。⁶⁾

高瀬の課題は、戦時中の上意下達的な押し付け保育ではなく、戦後まもなく一世を風靡した抑圧解放理論による保育でもない保育の中で、新しい世の中に生きる子どもたちをどのような理想の下に育てていけばよいかの探求であった。

それがね、畑谷さんと一緒に「これからの保育のあり方は誰に聞いたらわかるだろう?」って民保の代表の羽仁説子さんに尋ねたのよ。そしたら羽仁さんは「乾さんよ!」って言うの。それで、週一回の職員会議を子どもが帰った後、夕方から始めるんだけど、そこには乾さん、法政大学の学生だった天野さん、泉さん、そして畑谷さんや私たち保母が出席してね、私たちが乾さんに「これからの保育はどう考えたらよいのか?」って尋ねたのよ。そしたら面白いのよ、乾さんたらいつも「そうだなあ。」と言って終わるの。ある時よ、「これまでは上下関係。これからは横の関係、仲間関係が大事なの。」って言ったのね。私は「これはいいことかも」と思ったのよ。

戦争の過ちを引き起こすような一人のボスを認めず、個人の力を互いに認め合い、仲間同士の力を出し合える集団づくりへの布石であった。これはこれからの保育のみならず、新しい社会のあり方や新しい人間関係への方向性を示すものでもあった。こうして高瀬は、学者（研究者）が上で保母（実践者）がその話をうけたまわって実践するのではない、これからの保育を考えていくにはお互いが対等な関係で共に課題を乗り越えていこうとする姿勢を常に持つことが重要であると強く認識することになった。

② 平等な同僚性に基づく実践研究

しかし、平等な同僚性に基づく研究が大切と頭では理解はしたものの、実際にその手段を取得するには時間を要した。この当時について乾孝は次のように記している。

やっぱり研究者と保育者との協力の仕方はどうしたらいいかということの探り合いで、一年やそこらは無駄遣いしているのです。それは畑谷さんとか高瀬さんとかのベテランでも、どれが心理学者向きの質問かということをあらかじめ考えて質問するそういう素直な時代があったのです。⁷⁾

そこで、研究者と保育者の距離を近づけるために以下のような点が繰り返し確認されたという。（記録には研究者を専門家と記されており、保育者は実践者と記されている）

- ・従来の心理学の示している乳幼児の発達段階の枠に、現在の子どもをはめこんではいけない
- ・従来の心理学は、現場の実践のたよりにならないことを確認すること
- ・専門家と、実践者の共同研究から、子どもたちの今後の発達過程がつくられていく。そのためには、実践者は教育的働きかけを意図的に記録にとどめること⁸⁾

時代は朝鮮戦争をきっかけにして、日本の再軍備が進行しつつあった頃である。これからの子ども像について職場の仲間たち、地域の父母、民主保育連盟の仲間たちに対して草案を出した天野（労働者クラブ保育園での同僚、民主保育連盟のメンバー）は、どれほど熱心に話し合いが行われたかを次のように記している。

資料作成の最初の頃は、極めて安易に「平和を願う人間づくり」という案をだしました。ところが、現場の多くの仲間から異論、反論が続出し、結果、平和は願っているだけでは達成されないのではないか、という意見が大勢を占め、子どもの理想像についても、観念

的、空想的に考えるのではなく、現実の社会の動き、社会の見通しをもつことが大事であることが確認され、最後の文章は、「平和な社会を積極的に礎く」人間に向けて乳幼児を育てていこうということに決まりました。そして、この目的に向けて集団保育という形—具体的には保育者と子どもが活動する場合、きまりや約束を大事にする、また、今日では多くの園で実践に移されている当番制、リーダー制—で子どもをどう組織していくか、そのための指導、おとなの組織作りをどのようにしていくか、毎週熱っぽく討論され、一つ一つ実践を積み重ねていったのが、1950年頃のことです。⁹⁾

こうして、「現場の多くの仲間から異論、反論が続出」し、一つ一つの実践を積み重ねていこうとする保育者と研究者の集団が形成され、高瀬もまさにここに身を置いていた。実践に対するこの活発な討議を押しすすめる中で高瀬は、「自分たちで働いて、みんなで手を組んで、相談し合いながら自分たち労働者の世界をつくっていけるような、そんな人間をつくらなければいけない。それには私たち自身を変えていかなければいけない。」¹⁰⁾ と考えた。日本が戦争に至る時代背景の中で、上からの命令をうのみにしてただ従うだけだった自分を変革する必要性を感じたのである。

互いが主体的に取り組み、積極的な討論や研修を可能にするために、つまり、保育者の記録が研究者にも理解できるように記録のとり方も工夫されていった。それは保育者がどのような意図を持って子どもに働きかけたかが明確に理解できるように、保育者の言葉はひらがなで、子どもの言葉はカタカナで実践の記録を書くという方法である。そして、この記録をもとに保育者と研究者が対等な関係で、新たな保育理論と子ども像の探求を続けた。高瀬は、記録に基づく仲間との研究について、

そういう確かめの中で、やはり集団の中でこそ、私たちの未来像に向けて子どもが育つのである、ということと、働く人たちの組織との横の連帯を通してこそ、保育実践の発展があるのだということを学んだ。

と言っている。

③ 集団保育の意味と子どもの認識のすじみちを探る

新たな保育理論と理想の子ども像の探求は、高瀬に「集団保育の意味」と「子どもの認識のすじみち」について熟考させ、高瀬の保育者としての専門性をさらに向上させた。

それはまだまだ初めの頃で、この子どもたちの中に入りながら、労働者像を見つけていくって、どういうことなんだろうなあ、などと思いながら歩いていたわけです。そして、

そんな中で見つけたことは、未来の労働者像に向かって、何をどう保育するか、ということの中には、集団の中のどの子ども、自分がいやだと思ふことは、いやだと言えなければいけないんじゃないか、ということです。¹¹⁾

子どもたちの生活の中に弱者と強者の関係がいつの間にかできて、強い者は弱い者をいじめ、弱い者はいつもその犠牲になる現実に対して、高瀬は子どもたち同士の、そして子どもと保育者の人間関係を変えなければ「みんなで手を組んで、相談しあいながら自分たちの新しい世界をつくっていく」ことはできないと考えたのである。これまでの保育においてはあくまでも保育者と子どもの関係で「みんながいやがるからやめましょう。」と説得していた。この方法に対する批判から新しい保育実践をどう導くか、高瀬らは「集団を妨害する子ども」の実践記録をもとに職員会議で問題にしたという。

一人の強い子どもがあって、みんながそれになびくというのは、まわりの子どもにも問題があるのではないか。まわりの子どもがいやなことをいやと言えない。そのまわりの子どもを変えなければ、強い子ども変わらないのではないか。という結論に達しました。それではどういう手を打つべきか、何をきっかけとして、どういうふうに変えるのかとケンケンガクガクだったわけです。¹²⁾

熱心なこの話し合いでは、集団の指導について「一人の乱暴ものを、一対一で保母がいましめるより、みんなの問題にした方が、効果が的確にあらわれること」「一人一人が、自分の考えをもち、そして、はっきり意思表示することから出発すること」¹³⁾ という2つのカギが発見できたと記されており、さらに高瀬は「やはり集団の中でこそひとりひとりが変わっていき、そして集団保育の意味はそこにあるのだ、というひとつの方向性を、なんとなくではあったけれども、つかめたように感じた。」と話す。

さらに労働者クラブ保育園での実践では子どもをもっと地域の中で育てようという思いから、北区の労働者街に連れ出したところ、子どもの科学的認識は生活の中の事実を見つけさせて育成するのが望ましいと気づいたと言う。

「風。風がこっちから向こうに吹いているから、煙が行くんだよ。先生。」こういうところで子どもと話し合いながら、事実を見つけさせていくこと、科学的認識とはこういうことなのか、と関心しながら帰り途中子どもを引き連れて歩いていると「オレンチの父ちゃんの日産化学のが一番太いよ」「ちがうよオレンチだい」なんて後ろのほうで盛んにけんか

している。(中略)「測ってみればわかるよ、先生。ものさして測るんだよ。」そんな時、地域の中での子どもの生活を、また子どもが何を考えているのか、感じているのかをみせつけられるのですね。¹⁴⁾

この気づきは後に高瀬の子どもの科学的思考の育成や子ども認識のすじみちについての学びを深めさせるきっかけとなった。この後、勤務する豊川保育園においての「クレヨンの種を蒔く」実践(植物の成長過程を子どもに理解させるために、子どもの経験をとおしての疑問を確かめながら科学的なものの見方を培うという実践)¹⁵⁾につながっていく。

このように保母の社会的使命を意識した高瀬は、仲間とそして実践の記録とともに、労働者クラブ保育園において、新しい保育者像と目指す子ども像や集団保育の意味、さらには子どもの認識と知的要求の伸ばし方についての探求を開始したのであった。労働者クラブ保育園解雇、民主保育連盟(1951年)除名後、井の頭保育園に勤務しつつ熱心に臨んだ幼児教育研究会(1952年から1955、6年頃まで)においても、自らの実践記録を俎上に上げ、討議の資料とし続けた。

④ 幼児教育研究会での「おはなしづくり」の実践

労働者クラブ保育園で活動した高瀬、畑谷、天野らは、内部意見の不一致が原因で、保育園からの解雇と民主保育連盟からの除名という苦渋を味わう。高瀬らメンバーは四散した。しかし、「その後の保育界の動き、保育行政の反動化、保育における研究至上主義の進行に対して黙視することのできない」彼らは教育科学研究会と関係を持ち、研究と実践の結合をめざす幼児教育研究会を立ち上げた。¹⁶⁾

幼児教育研究会の討議の中心内容は、「集団保育の再検討、生活綴り方的教育方法を幼児教育にどのように適応させていくか」であった。「子どもたちの認識を探り、更に高めるために、お話あそびをやってみてはどうか!」という天野の提案を高瀬ら研究会のメンバーは実践に移す。おはなしづくりは、単に言葉の指導に留めず、綴り方を書かせることのできない幼児たちに、ことばによる表現を指導し、保育者が綴り、その言葉にひそむ幼児の考え方、感じ方を汲み取ることを行う保育実践であった。メンバーの所属する数箇所の幼児施設でこの実践が行われ、指導の差、地域の差などが明確に記された実践記録を対比しながら、幼児の認識や発展の方法を分析し検討しあった。

[おはなしづくりの一例] 子どもたちから子猫のはなしをつくろうと言い出したので、討論の末、「ぺろ」と「のろ」という名前をつけた。

子どもA 子ドモタチガミンナ帰ッテシマッタノデ、ペロトノロハオ庭ニ行キマシタ。

高瀬 おにわってどこの?

- 子ども A 保育園ノダヨ。
 子ども B ソシテ砂場デ遊ンダノ。
 高瀬 何をして？
 子ども C 穴掘り、足デヒッカクミタイニシテサ！
 子ども A ソシトラ、ガイコツデテキタノ。
 高瀬 ああこわい。がいこつなんて、いやだな。
 子ども D ジャア、魚ノホネネ。…猫ガ好キダモン。
 子ども B 一本シカ出テコナイノ、ノログ半分ニ割ロウツテ言ッテ。
 子ども F 半分ニヒッパツテ、ワツテ、食べマシタ。ソレデ、オワリ。¹⁷⁾

高瀬の発言によって、幼児の話はより具体化し、また大きく膨らんでいく。

高瀬が求める新しい保育（教え込みの保育でもなく、抑圧開放理論に基づく保育でもない保育）への探求は、子どもたちのおはなしづくりによって、子どもが各自の生活経験を通してどのようなものを見ているか、考えているかを保育者が理解しようと努めることによって始まった。この理解をもとにみんなで相談しながら、新しい世界をめざす子どもの集団をつくるきっかけを得たのであった。

(7) 第7期 豊川保育園時代（1955年8月から1985年3月）

① 保育問題研究会と「はなしあい保育」の実践

「おはなしづくり」の実践は、高瀬が井の頭保育園の後に勤務した豊川保育園においてじっくりと熟成した。豊川保育園は、労働者クラブ保育園での内部混乱に疑問をもった父母たちが中心になって誕生させた保育園であり、高瀬は畑谷、天野ら労働者クラブ保育園で共に活動した仲間と一緒にの出発であった。

高瀬は、幼年教育研究会での学びを重ねつつ、1953年に発足した第2期保育問題研究会に所属した。保育問題研究会の発足当時のメンバーは、城戸幡太郎、羽仁説子、乾孝、秋田美子、周郷博、早川元二らに加え、幼児教育研究会の会員とその講座を熱心に受けた幼稚園教諭、保母たちであった。「有名人やえらい人たちの話を聞くばかりでなく、どんな小さな問題でもとりあげてじぶんたちで解決していく会」¹⁸⁾ という姿勢で開始され、1955年に第1回研究総会が開かれた。保問研での部会の様子を高瀬はこう語る。

発足当時、ひと月に一回ほど開かれる部会は、7～10人程度の参加者が車座になって、「子どもたちにこう関わったらどうだった」とか「ああやったら良くなった」とか、日ごろの保育実践を一晩中交流しあう場だったわね。法政大学の研究室だったり、新読書社の伊集

院さんの部屋だったり、どこかの保育園だったりいろいろな場所で行ったのだけれど、それぞれが実践の記録を持ち寄って、みんなで批判したり、ほめたりしあったのよ。

各月の部会も徐々に活発さを増し、1957年には8つの部会が活動を行った。労働者クラブ保育園で工夫し編み出した、保母の指導の意図を記した実践記録を持参した活発な研究スタイルはここでも貫かれた。『保育問題研究』には「保育者たちの自育ぶり」として掲載された会員の手記が以下のように掲載されている。

昨日の部会で、私のキロクについていろいろ討論されました。あれで自分の意識がはっきり成長するのでしょうか、人と話し馴れない私にとって限りなく恐ろしい場です。(中略) いわれる事は良くわかるのですが、コワイという感情は消えません。コワサも恥ずかしさも我慢しないと、何時までも脱皮できないんだぞと、自分にいいかせています。¹⁹⁾

コワサを感じつつも、部会に参加し研究し続けた会員たちの原動力は何だったのか。高瀬は「いつも研究していないと、自由、自由と言っている人たちにつぶされてしまいそうだったのでがむしゃらだった。先輩たちはいつもおっかなくて、でも鍛え上げなきゃと思っていたんですよ。これまで軍国主義でみんな押さえつけられてたから、どの子どももみんなその子なりの力を出せる保育をしたいと思ったし、そのために熱心に研究も重ねたのよ」と語る。つまり、自由を標榜する人間が、文字で理念を語るのは簡単だが、目の前の子どもたちに真の自由を獲得させるためにはどうしたらよいかは、懸命に実践研究を行わなければならないという強い意識があったのである。さらに、一人一人の子どもの良さを出す保育を志すためには、保育者自身が物怖じせず、自分の意見を研究会の席で発言する力を持つ必要性を高瀬は感じていたのだろう。

このように、部会には各自の実践の記録が持ち寄られ、「おはなしづくり」の指導を仲間とともに検証することによって、幼児の集団思考の可能性を見出していった。持ち寄られる保育実践例をもとに、保育者と子どもの関係、子ども同士の関係が分析され、保育者の言葉の働きかけの重要性が意識されるようになっていった。この保育者の働きかけと、子ども一人一人の生活に対する考え方、要求をどう結合させるかという中で「はなしあい保育」という発想が生まれた。²⁰⁾

畑谷が「保育者が一人一人の考えを引き出し、子ども同士の協力関係をつくりながら、具体的な行動力を育てるめどをつかみました」と記しているように、「はなしあい」が、保育者と子どもたちとの共同理解の場を作り、集団生活を自律的にすすめていくための保育の技術として捉えられるようになった。「はなしあい保育」は、「はなしあい」を通して子どものもの見

方、考え方を知り、これまでにはなかった子どもの側に立った発想で子どもの要求を掘り起こしていこうというものであった。つまり、保育者の教育要求と子どもの活動要求（生活要求）との接点で保育実践を行おうというものである。

② これまでの保母像の払拭

高瀬は、これからの子ども像、新しい保育の方法の探究を続けながらも、これまで自分が抱えてきた保母像に対する反発精神をぬぐえずにいた。

養成所を終えて、はじめに職場に立ったとき、まず私の頭に浮かんだ保母の理想像は、子どもに対して、いつもやさしくにこやかに、太陽のごとく明るく。乱暴な言葉を使ってはいけない。やさしく訓せ、終身の教科書のような。しかし、そうすると職場にある時の自分はどこにいるのだろうか。その表面的な教えが「オスナバ、オバスケツト、オクツ、オマチガイサンデスヨ」に連なる保母ことば、子どもの中に食い込む迫力はどこから見つけてよいものやら見当がつかない。見せかけの丁寧さだけで、そらぞらしい。²¹⁾

さらに経験豊かな保母から高瀬に向けられたのは「要は、子どもをかわいがればいいの、母親のように。本当に可愛いがれば、子どもは自然になついてくるのよ」という言葉だったという。これに対し、高瀬は次のように疑問を抱いた。

可愛いがるって、どうすることなんだろう？ どの子どもどの子ども頭を撫で廻せばそれですむのかしら。(中略) 母親のような愛情で—ということば、保母は皆母親的でなくてはならないのだろうか。それは子どもの成長のために、何ものをも犠牲にして、という全生活をなげだしたものでしょう。それでは、いったい仕事としての保育をどう考えたらよいのか。私は母親にはなれない。²²⁾

悩む高瀬は「ただ自分をそのまま子どもにぶつけばよい」という短絡的な解決策で子どもに対するが、子どもへの心遣いを置き去りにした保育が原因で、子どもとの離反を味わう。

しかし「はなしあい保育」を続ける中で、空々しい愛情を標榜する保母像からの脱却が可能となった。「はなしあい保育」の探求をはじめた高瀬は、各々の子どもが何を考えているか、その立場になって判断しようとしていた。その頃の保育室での出来事である。2、3人の年長組の男の子が、ひそひそ楽しそうに話し合っている。話の中に入れてもらおうと高瀬が近づくと、案の定「先生、笑ウダモノ」と将来のお嫁さん談義を止めてしまった。「笑ウクライヤダ」と言われた時、子どもから見た大人像に気づいた。子どもと同じ気持ちになって話し合わず、大人から見た子どもとして「なんて可愛いことをいって」と笑い流したり、また「この子

はませていることをいう」と批判してしまったりしているのではないかと。そして、次のように気づいた。

子どもの考えている同じ線の上になつて、子どもの気持ちになつて一緒に相談にのること、これが子どもと気持ちを結ぶことになるのではないかと。空々しいことばも、つくり物の優しい物腰も必要ないこの線上においては、保母のこうあって欲しいというものも、素直に子どもの中に入れていける²³⁾

子どもの置かれている立場や気持ちを理解することによって、子どもと対等な関係で、その先をどう指導したら子どもたちの本当の幸せに貢献することができるかを熟考する、これが高瀬の求める保育者像であった。

③ 保育学会で得た自信

1958年、これまで研究を重ねてきた「はなしあい保育」について、日本保育学会で研究発表を行うことになった。保問研のメンバー4人の発表内容は「はなしあい保育の歴史」「はなしあい保育の意図的指導」「はなしあい保育の考え方とその技術」「はなしあい保育における保育者の問題」「子どものあらかれの検証」であった。これまで大勢の人前で発表を行うことなど、大の苦手と考えられていた高瀬が、保問研での活動を伝えるべく、「はなしあい保育の意図的指導」についての発表をおこなった。自分の要求ばかり通して友達の言い分を聞けない「はじめ君」に対して、①どのような指導の意図をもっていたか、②「はじめ」君の生育歴、③「話し合いから行動」の実践報告、④「はじめ」君と子どもたち（集団）の行動の変容からいえる結果の発表であった。当時を振り返り、その心境と自身への自信を次のように語る。

これまで月々の部会や年に一度の総会で、「私はこういうことに困っているんだけど」というあるメンバーからの疑問や悩みを「こうやったらどうだろう、ああ関わってみては良いかも」という風にやってきた。だから研究至上主義的な人々がいたら、その人たちに対してあつと言わせるような発表をしてやろうって思っていたの。仲間との一緒にの勢いよね。これを機会に大勢の前で話すのが平気になったのね。

そこにはそれまでと違った高瀬の姿があった。悶々とした保育への負の感情を引きずり、自信に欠ける高瀬は存在していなかった。高瀬はさらに続けた。

子どもの考えていることを解ろうとするこのおもしろさがわからないなら、保育なんてぜんぜん楽しくないじゃない。ぞうきん洗いながらだつて仲間と子どものおもしろさを話す。

子どもと実践するのって楽しいじゃない。保育の理論化ってくたびれたけど楽しかったわね。

毎日の保育に対してこう考えるようになった高瀬のもとには私立保育園、公立保育園から保母が見学に来ては「私もやってみよう」という思いを持ってそれぞれの園に戻っていたという。豊川保育園見学で高瀬の保育実践を見学した保母はその様子を次のように記している。

遊んでいるときの子どもたちは実にのびのびとしているのに、あの話し合いの中に入ると、どうしてあんなに集団を静かにまとめていかれるのだろうか、あれはやっぱり保育者の技術だろうかというような話で持ちきりでした。また、ここでは何時もこのような話し合いの中からすべての保育がなされていることを知りました。毎日これかと思う題材をとらえそれを中心としての話し合いにより、言語の発達や生活指導はもとより、楽しい歌づくりや共同製作、行事の持ち方や毎日起こるけんかを裁くまで、話し合いを中心になされていることを知り、それが子どもたちに自主性を持たせ、社会性を養うのにどんなに役立つかということも、実際の保育を見てしっかりとつかみとることができました。²⁴⁾

どういう子どもに育てるのか、そのためにどのような指導観を持つべきか、保育実践を第一義的に考え研究する仲間の中かで、高瀬は新たな保育「はなしあい保育」のパイオニアとなっていた。「理論は実践をくぐらないと本物にならないよね。理論から実践がでるんじゃないのよ。」高瀬は繰り返しこう語る。

④ 「はなしあい保育」から「伝え合い保育」へ

しばらくすると、保問研内には子どもの言葉の指導、生活の指導に「はなしあい」は意義があるとする人たちと、「はなしあい保育」はことば偏重の保育ではないか、また保育者の指導性や教科の系統性に欠けるのではないか、とする人たちの疑問や批判が出されるようになった。

このような状況の中で、労働者クラブ保育園からとり始めた高瀬の実践記録はこの頃までにおびただしい量の実践記録となって蓄積され、記録のとり方、保育観、保育方法の視点から保問研の部会内で何度も議論の俎上に上った。理論部会においては、高瀬を含め3人の記録について指導の意図、指導技術の違いや共通点を比較検討した。²⁵⁾ このように実践記録にあらわれた子どもの扱いをめぐって、お互いの保育観や考えを交流する中で、高瀬は「はなしあい保育」について次第に以下のような考えを構築していった。

子どもの生活の中から、物事に対する理解度、心の動きを細かくとらえなければ、どんな立派な子ども像を描いてもそれは空論になってしまいます。それで、保育者と子ども間で

お互いに問題を交流させ、さらに子どもから子どもへ広げるよう『話し合い』を指導してみました。話し合うことによって、子どもの理解度、発達の状態を生活の中で探りながら、その指導の方法を確かめてゆくことができます。(中略) 一人一人を大切にし、お互いの立場をも考えられる集団生活を築き上げるための話し合い保育なら、当然それは、話し合いの場だけに止まらず、日常の子どもたちの行動がその話し合いによって、発展していかなければなりません。²⁶⁾

こうして保間研内において、「はなしあい保育」について、単にお話が上手に聞け、話し合いが上手にできるということだけでなく、話し合いから行動へそして話し合いという循環を通して子どもたちに生活を深く考えさせ、認識を広げていくことの共通理解が次第に求められるようになっていった。

その後、話し合い保育は技術だけでなく、保育観や人間観にかかわりを持つことが明らかにされ(絵画、音楽教育における伝え合い、乳児保育における伝え合いについても討議されるようになった)、保育者の一方的な話し合いや子どもたちの好き勝手な話し合いを区別する意味で、「伝え合い保育」と呼ばれるようになった。²⁷⁾ 高瀬はこう言う。

「話し合う」ということは、単にあやまちを非難することではない。「話し合い(伝え合い)」によってその子の弱さをみんなで考えること、そして、新しい生き方をみんなで考え生み出すこと。だから、わからない子や遅れた子を仲間に入れていくことに心を砕いたわ。保育者同士の関係だって全く同じことよ。横のつながりを大事にしたいし、仲間と一緒に成長していく関係を築きたいじゃない。

多くの保育者や研究者と共に、日々の実践とその記録を中心に据えた共同研究によって成長を促進させた高瀬の、同僚性の大切さを説く言葉であった。

結語

戦後、保育者の社会的使命に目覚めた高瀬は、同僚とともに新たな社会を目指す子ども像、新しい保育理論や技術の確立に邁進した。「保育をするということはただの子守りではなく、理想の子ども像をもつこと、そのことは未来の社会観を持って子どもを保育するということ」と語る高瀬が、仲間とともに確立した研究スタイルは、研究者も保育者集団も、先輩も後輩も対等な立場で、お互いの実践の記録を元に検討しあうというものであった。これは生活の中で考える子ども、今の大人を乗り越える子どもを目指し、自分自身の保育観や技術を修正し、かつ、お互いの保育を高めあおうとする情熱にあふれるものであった。高瀬のおびただしい記録

の量がそれを物語る。

高瀬は「書くことで子どもの面白さの追求をしていたのよ。子どもってこんなこと考えてるんだって」と笑顔で語った。実践記録から深く子どもの姿やことばを省察し、新たな計画を立て実践する、この循環が高瀬が求めていた大人と子どもの相互主体的保育を実現させた。今でこそ保育は子どもの心に共感し、子どもの理解からの出発が当たり前となったが、終戦直後の当時、このことへの気づきは各自の実践を仲間の前に示し、自己を振り返り矛盾を正そうとする保育者集団があつてこそ可能であつたといえよう。

高瀬はその時々保育者との出会いの中で、子どもの命を守る保母から、連帯の中で未来の社会を生きる子どもを育てる保育者へと専門性を高めていった。そしてこの専門性は高瀬一人の勘やコツを熟達させて高めたのではなく、同僚性、研修によって気づき、築かれるものであつた。そこには苦しみが伴っていたが、彼女の根底には子どもに対する愛、平和への希求があつた。

注

- 1) 全国保育問題研究協議会編集委員会、『季刊保育問題研究No63』1978、新読書社、p.103
- 2) 高瀬慶子、『保育の探求—自由保育を超えて—』1977、新読書社、p.261
- 3) 高瀬、前掲書、p.265
- 4) 全国保育問題研究協議会編集委員会、『季刊保育問題研究No63』1978、新読書社、p.104
- 5) 全国保育問題研究協議会編集委員会『季刊保育問題研究No68』1979、新読書社 pp.60-61
- 6) 前掲書4)、p.104
- 7) いぬいたかし『伝えあい保育論集』1982、新読書社、p.31
- 8) 畑谷光代『つたえあい保育の誕生』1968、文化書房博文社、p.30
- 9) 天野章『つたえあい保育の展開』1972、文化書房博文社、pp.13-14
- 10) 前掲書4)、p.104
- 11) 前掲書4)、p.106
- 12) 畑谷、前掲書、p.34
- 13) 同上、p.34、36
- 14) 前掲書4)、pp.105-106
- 15) 高瀬、前掲書、pp.125-138
- 16) 天野、前掲書、p.16
- 17) 畑谷、前掲書、p.82
- 18) 『保育問題研究No.1』1954、p.2
- 19) 全国保育問題研究協議会編集委員会、『季刊保育問題研究No42』1959、新読書社、p.11

- 20) 天野、前掲書、p.33
- 21) 高瀬、前掲書、p.274
- 22) 高瀬、前掲書、p.275
- 23) 高瀬、前掲書、p.281
- 24) 全国保育問題研究協議会編集委員会、「保育問題研究No.38」1958、新読書社、p.8
- 25) 法政大学内保育問題研究会【保育問題研究No.42】1959、p.9
- 26) 法政大学内保育問題研究会【保育問題研究 附録】1959、p.7
- 27) 天野、前掲書、p.541

キーワード

保育者の専門性 協働性 同僚性 ライフヒストリー